

金融市場動向

— 平成8年1月 —

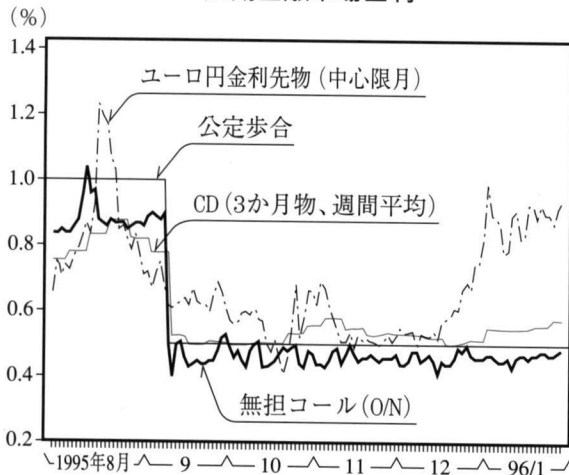
(平成8年2月16日)

1. 短期金融市場

1月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、公定歩合をやや下回る水準で横這い推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートは、月中を通じ0.5%台半ばで推移した。ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、上旬には0.8%を割り込む局面もみられたが、下旬以降は0.9%を挟む水準での小動きとなった。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は、38兆5,866億円と前月（39兆5,431億円）に比べ減少した。

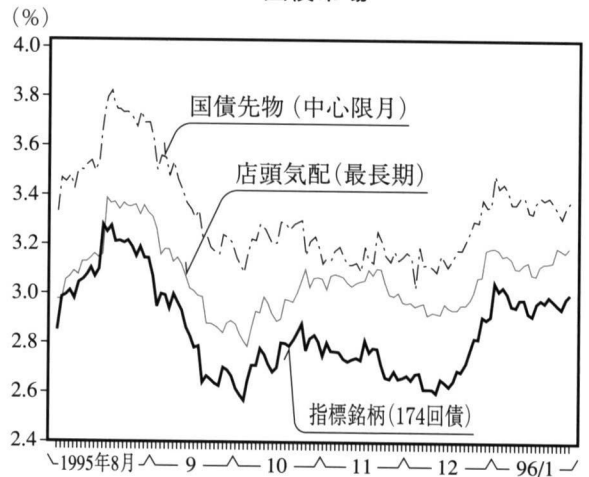
短期金融市場金利



2. 資本市場

1月の長期国債利回り（174回債）は、月初にやや上昇した後は概ね横這いで推移し、3.000%で越月した（前月末2.905%、国債先物

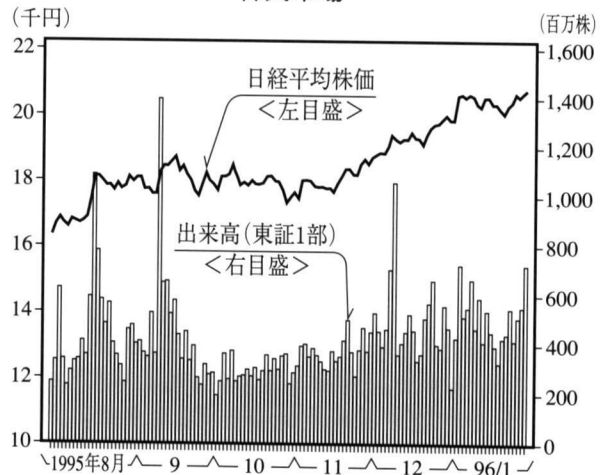
既発債市場利回り
— 国債市場 —



中心限月利回りは3.373%＜前月末3.356%＞で越月。国債の出来高は、現物（店頭取引）は前月を上回り、先物は前月を下回った。

1月の株式市況（日経平均株価）は、中旬に

株式市場



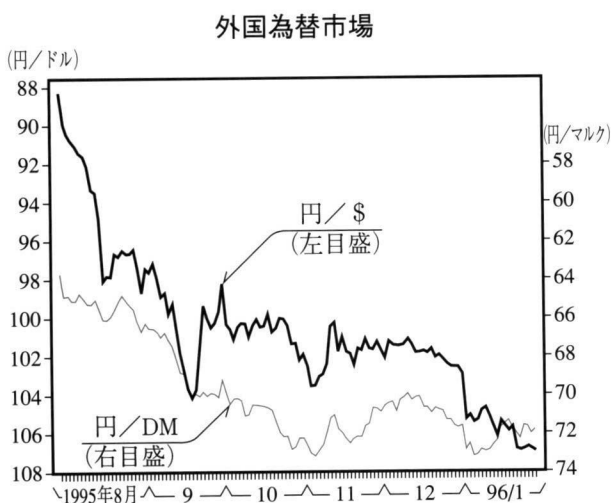
やや弱含む局面もみられたが、円相場の軟調地合いや米国株価上昇等を受け、概ね堅調に推移し、結局、20,812円と前月末（19,868円）を上回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、5.16億株（速報）と前月（4.95億株）を上回った。

1月の国内公募普通社債は、年初の季節要因に加え、長期金利の強含み等を背景に一時的に手控えムードが広がったことから、月中1,810億円（12月6,210億円）の発行にとどまった。一方、国内エクイティ市場での発行（1月払い込み分、増資を除く）は、引き続き低水準となった（12月645億円→1月740億円）。

3. 外国為替市場

1月の円の対米ドル直物相場（東京市場）は、月中を通じ軟調に推移し、106.92円（17時時点）で越月した（前月末102.91円）。円の対独マルク直物相場（東京市場）は、71～73円台でのみ合いで推移したが、結局、71.80円（17時時点）とほぼ前月末（71.61円）の水準で越月した。

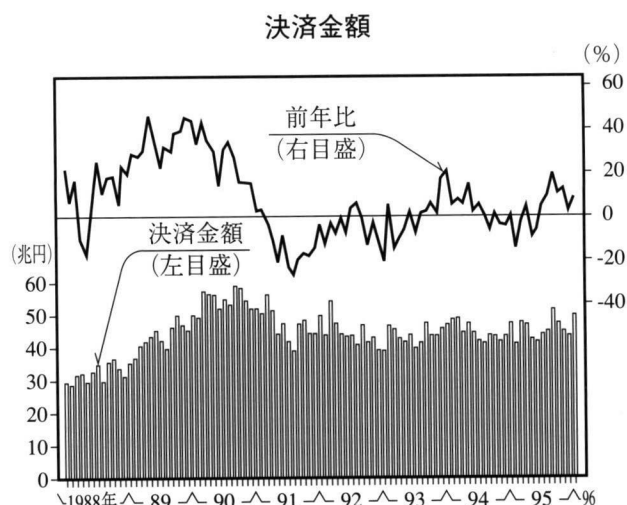
この間、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日



平均）は258.3億ドルと、前月（179.1億ドル）を上回った。

4. 決 済

1月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を上回り（前年比+3.9%）、全銀システム取扱高も前年同月を上回った（同+10.0%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+9.3%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を大幅に上回った（移転登録：前年比+30.1%、振込口座振替：同+46.4%）。



（注）1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

1月の資金需給をみると、銀行券要因が5兆9,908億円の余剰（前年同月5兆3,442億円の余剰）となり、財政等要因は3兆2,934億円の不足（同1兆7,964億円の不足）となったことから、全体では2兆6,974億円の余剰（同3兆5,478億

円の余剰)となった。

こうした状況下、日本銀行はF B売却等により資金を吸収した。

2月の資金需給(国債発行織り込み前)を窺うと、銀行券要因は月中5,500億円程度の不足(前年同月1,844億円の不足)となる見通しであり、財政等要因は、受入面で源泉税を中心とする税揚げが見込まれるものの、支払面で国債償還のほか、厚生・国民年金の定時払い等が高むことから、5兆2,700億円程度の余剰(同5兆1,768億円の余剰)となる見通し。この結果、全体では、4兆7,200億円程度の資金余剰(同4兆9,924億円の余剰)となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

12月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.3%(速報)と前月に比べ0.1%ポイント低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+4.2%(速報)と前月に比べ0.1%ポイント低下した。

1月の銀行券平残前年比は+8.5%と前月(+6.5%)に比べ上昇した。

1月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+3.6%と前月に比べ0.2%ポイント低下した。一方、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+2.2%と、前月に比べ0.1%ポイント上昇し、9か月連続の前年比プラスとなった。

7. 貸出・預金金利

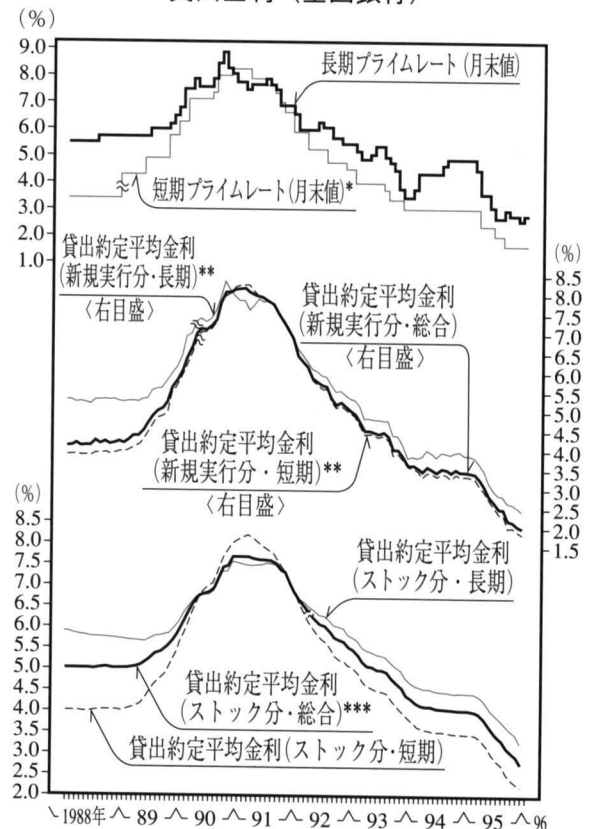
12月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、新規実行分は、短期(前月比△0.071%)、長期(同△0.097%)ともに低下し、総合でも

14か月連続の低下(同△0.071%、11月2.088%→12月2.017%)となり、既往ボトムを更新した。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越ともに低下し(短期:前月比△0.083%、長期:同△0.225%、当座貸越:同△0.099%)、総合では30か月連続で既往ボトムを更新した(総合:11月2.963%→12月2.788%)。

この間、12月の定期預金金利(自由金利分<1千万円以上>、3か月以上6か月未満の全銀新規受入金利平均)は、前月に比べ低下した(11月0.500%→12月0.490%)。

貸出金利(全国銀行)



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)